

## 婦人労働雑感

私が婦人労働の仕事にたずさわつたのは戦後のことで、まだ、かけだしですが、私の仕事の遍歴のなから、一部をお送りいたします。

### 山越え

ずいぶん、ふるいことになりましたが、昭和二十四年四月十日、第一回婦人週間が全国一斉に行われたときのことです。当時、私は労働省婦人少年局の地方出先機関である大分婦人少年室に勤務していました。

婦人がはじめて参政権を行使した日を記念して、県下各所に婦人週間の大会をもつための準備がすすめられ、いよいよ、その当日となつたわけです。中央（大分市）県南（中津市）県北（臼杵市）山間部（日田市）の主要な大会の状況をみるために、駐留車からジープが出されるのを幸、それに便乗して、早朝、大分市を出発、まず、中津市の会場に向いました。

中津市は、昔から商業の中心地で、市内に大紡績工場が二カ所、近在に製糸工場が一カ所あります。婦人労働者の働く大工場が数えるほどしかない大分県としては、これで珍しく数の多い方でした。公会堂には、婦人団体、関係機関の協力で、もつと高めましょう、

伊藤 俊子

（三三回生）

私たちの力を、私たちの地位を、私たちの自覚を、のスローガンが掲げられ、参会者も定刻までに集つてきています。ところで、工場に働く婦人は、団体で入場したせい、一定の場所に肩をすばめており、各会社毎に、おそろいの服装をしていてなんとなく、婦人団体とはちがつた雰囲気をもっているのが気になりました。両者は丁度水と油のようにちぐはぐのまま、大会のプログラムが運ばれていきました。はじめての試みとしては、大会の方は万事好調でしたが、私の心のなかには、この時の印象があとまで刻まれています。働く婦人が特別な眼でみられていた戦前の習慣がどこに残っていたからかもしれません。それから幾年、このような雰囲気はほとんど影をひそめた今日とくらべて、働く婦人の進出と実質的地位の向上がしみじみ感じられます。

中津の大会は午前中ですまし、夜の日田市の大会のために、車は耶馬溪をぬけ、大分県の山間部を横断しました。文字通り九十九折りの森林地帯の道路は丁度、天皇陛下行幸のあとで、舗装されてい

たので案外早くはかどりしました。途中、製線工場（ベットのスプリング製造）農協事務所、製材工場、製粉工場など、人里はなれた場所にてたてられている工場を訪れ、そこで働く婦人たちに会って話をすることができました。婦人開放の風潮は、県庁の所在地大分市に、いやがうえにも高まつている頃でしたが、山の中で働いている婦人たちは、そんな話をキョトンとした顔で聞いていました。労働基準法が全面実施になつてから一年ほどでしたから、こんな僻地では無理だつたわけですが、いまではこの人たちもきつと、職場でも、家庭でも、農村でも、新しい民主的生活の自由を享受していることでしょう。

日田市は、大分県の京都といわれる山紫水明の地で、伝統を重んじるのですが、大会は婦人団体が主になつて、盛大に行われました。勿論、職場の少いところで、働く婦人はほとんどみられませんでした。

夜、地元の肝いりで、鶏飼が行われましたが、私たちと同行したアメリカの婦人係員は撮影に夢中でした。その技術といい、身のこなしといい、素人とは思えませんでした。あとでこの婦人は、アメリカの某雑誌のカメラマンとして責任ある地位についていたこと、写真技術者として、男子を凌ぐ腕前であることがわかりました。そして、アメリカの婦人の専門的技術的職業分野が、広範囲にわたつてゐる資料をみせてもらい、婦人週間で思いがけない拾い物をした感じでした。

翌日は、午後の大分市の中央大会のために早朝、日田を出発しました。車は、右がいわゆる千じんの谷、左が高い山の崖となつてゐる、やつと通れるような細い道をくねくねし乍ら、下つていきまし

た。重畳する山また山、をして、その山ひだの深いこと。けわしい山道で車の振動にはねあがられながら、私は今さらのように考えました。——この山と山とにへだてられた人たちのふるい考え方をどうしたら啓発できるだろうか。——

山が途切れて、車は別府灣を一望におさめながら、一路別府市へ下つていきました。目前にひらけた別府市の歓楽街は、山裾を走つていたときの私のわびしさとあまりに對蹠的でした。しかし、この温泉地にはまた旅館に働く多くの婦人たちの問題がひそんでいるわけです。のちに、この婦人たちは全国にさがけて旅館従業員組合を結成して気をはきましたけれど、当時、労働基準局に、旅館の女中の雇用契約、賃金の支払、労働時間の問題で申告がたえませんでした。

大分市の大会は、県下の働く婦人、婦人団体の代表が、出席して盛大に行われました。婦人解放に関する法律の正しい理解のために、憲法、民法、労働基準法についての講演があり、各地各層の代表から、婦人の地位の向上を阻む原因について、意見発表と討議が活潑に行われました。

次のコース県北は、海岸添いの漁村と、いわゆる「羽織島」という一枚の羽織に覆われると見えなくなるほどせまい段々島が頂上まで続いている零細農家の多いところです。製糸工場一、みかん罐詰工場数カ所が主な婦人の職場ですが、罐詰工場は季節労働で労働時間、労働環境、寄宿舎などに問題が多いので、一般の大会のあと、職場を巡つて、働く婦人と話合いました。漁期の合間をみて働きに出てくる婦人たちは、にわか造りの工場の中で、ゴム長靴、ゴム前掛けのいでたちで、水びたしの土間で働いていました。最近はこの

ような水産加工の生産が急速に伸びたため、これらの工場に働く婦人は、昭和三〇年の国勢調査では全国で七万三千人といわれ、紡績工の八万五千人と匹敵するほどになっています。生産機械も近代化されてきていますが、婦人労働者の保護には今なお、多くの問題が残されています。

### 都会の裏街

昭和二五年から私は東京婦人少年室に移りました。大分県では労働基準局に届出られた労働基準法適用事業場は、五、〇〇〇にすぎませんでしたが、東京都は一〇万を越え、婦人労働数も三三万をかぞえています。そして表通りは全国の大会社、大資本が集中していますが、裏街ではまだ、都市の近代性とかけ離れた原始的な婦人労働が行われているのです。一、二をのぞいてみましょう。

A 印刷製本業(千代田区)——従業員六〇人中、婦人は二六人、事務、若干名のほかは、製本工、折工、丁合工が主で、文選工、解版工も数人ずつ働いています。工場全体が狭く、暗く、乱雑なところで、つぎ足し、建増した凸凹の建物の中に、印刷物と裁ち屑の残が山積しています。

活字の鑄造は男子の職場ですが、なかに婦人が雑用で二人働いていました。活字用の鉛から発散する鉛のガスは、排気装置がつけられています。女子年少者労働基準規則では、鉛の蒸気が発散するところでの婦人の労働は禁止されていますので、この婦人は配置転換させられました。

製本工については、婦人の残業と深夜業が問題になりました。原稿のメ切がおくれるために、印刷から製本へとしわよせされるとい

われていますが、出版社への納期を控えての婦人の製本工の労働時間は嚴重にとりしまられました。

B 衣服身廻品製造業(港区)——従業員四二人中、裁断部の男子数人を除けば、ほとんど、婦人のみしん工で、賃金が出来高払いのために、動力みしんの音もすさまじく、目にもとまらぬ早さで、幼児服が仕上げられてゆく。部屋一杯に据えつけられた機械と製品の山で足の踏場もないほどです。

ここでは、みしん針による指の怪我と、二階の工場に急勾配の階段が一つしかなく、非常時の避難設備のないことが指摘されました。当時は、既成服がそれほど一般化していませんでしたが、昭和三〇年の国勢調査では、婦人のみしん工は全国で一二万三千人をかぞえ、看護婦の一三万人に接する増加ぶり、既成服の利用が高まるにつれてこの産業分野に婦人のみしん工の進出がますます多くなることでしよう。そして、裏町の半家内労働的縫製業も、婦人労働者に対する認識をあらためてくることが期待されます。

C ゴム製品製造業(墨田区)——長靴、地下足袋製造業です。婦人は六〇人の従業員中約三分の一をしめています。婦人は成型工、底付工、吊込工、(ゴム靴、長靴の側布と中底を組合せる)裏貼工(裁断したゴム生地、メリヤスを貼る)胴貼工(地下足袋に補強用のゴムテープを貼る)仕上工、検査工などです。

工場全体が、通風採光ともに悪く、足元も凸凹で、能率的な活動のできにくい陰気な職場です。働く婦人は年輩の婦人が多く、賃金は月平均手取、六、〇〇〇円、休憩も、中食もゴムの裁ち屑の中でしています。ゴム製品の工場はこの地域には、かなりありますが、タイヤ、ホース、印刷機用ゴムシート、防水布などの工場は資本も

やや大きく、工場設備もいく分近代であるのにひきかえ、服物、玩具、水泳用品などの工場は、ほとんど、この工場のような状態で、婦人に手内職と全じような仕事をしているにすぎません。扶養家族を抱えて働く未亡人も幾人かいましたが、この低賃金では、家でまた内職をしているといっていました。

ガラス製品製造業（江東区）——ガラス食器を製造していますが、四五人の従業員中婦人は二〇八で、選別、研磨、仕上、検査、包装に働いています。選別では、ガラスの原料から不純物を選別して除いたり、同種のを種類別にしたり、大きい塊を小わりにしたりして、水洗機、粉碎機へまわす仕事をしています。包装と全じようになりかなりの荒仕事で、年輩の婦人が吹きさらしで働いています。研磨は同年輩の男女が同じように並んで働いています。婦人の賃金は勤続年数が短いという理由で、男子の三分の一にすぎません。紫や黄色の美しく流れているガラス食器がキラキラと研ぎ出されていますが、たえず、水をつけながら、研磨機ととり組んでいる婦人の手は太く、ささくれだつています。

## 陸の離れ島

福井県M町——福井市から電車で十数分の地点にある松岡町は、川の流れてそつて街道すじに細長くひらけた機業地で、狭い町のどの横町からも機音がけししい雨音のように聞えています。朱子織が専門で、婦人労働者は一工場平均三人、五人、織機一〇台、二〇台という零細機業地で、工場というよりは、家庭の一部に織機を設けたといった方がふさわしい工場がほとんどです。婦人労働者は殆んどこの町の家庭の主婦で、子連れで工場に働きにきています。最

も近代的といわれるA工場をのぞいてみると、二階の下拵（糸くり、糊付け、再燥）の部分は最近、企業協同組合にサイジングという機械が備えつけられたので、これに委託することになったとかで、機械は全部休止しています。階下は、母屋に続いて機織り場となっており、二〇台の機械が備えられています。織子（織布工）は、熟練者が一人六台の織機をもち、一台で三六吋巾ならば二日間で六〇ヤールを織りあげ、織賃は八五円をうけることになっていますが、材料が不足したり、家屋の都合で休んだりして、必ずしも、この賃金が平均とはいえないようです。機械と機械の間の狭い通路の板の間に、小さな布団がおかれ、幼児が無心に昼寝をしています。使用者が、工場の片隅に六畳の休憩室、食堂兼保育室を設けましたが利用する人はなく、相変らず工場の隅の人絹箱を出たり入ったりして、よちよち歩きの小児が遊んでいます。お母さんは、本箱に腰かけて、お弁当を開いています。

この工場の主婦が玄関で、むすかつている孫を眠らせるには、機械場に限りよとなつています。この辺の子供は、機械の音がはじまるとすやすやと眠り、機械の音がバタリととまる途端に目をさます。機械の音は何よりの子守歌だというのが子育ての信条のようです。このような育ち方をした子供の智能指数について科学的な検討がなされたとしても、果して、工場の機械の音の影響かどうか立証するには、より多くの資料と、より長い実験が必要でしょう。

座談会を開いて、働く主婦の声をきいてみましたところ、この町では、結婚すれば、機屋で働き、月四、〇〇〇円、四、五〇〇円位の給料をとりて農家の家計補助にすることが当然と考えているようです。家にいても、機音が聞えてくると、居たたまれないという

## 特集 卒業生の論稿

婦人もいました。また、家で姑と膝をつき合せているより工場暮らしがいいという嫁もいました。

このような企業形態と、婦人労働の慣いは、新しい時代の流れに押されて、徐々に協同組織に移行してきてはいるものの、一地域に小企業が密集して、伝統的に特殊な工業地帯を形成しているこのような陸の離れ島は、全国的に相当の数をかぞえるでしょう。婦人労働者の多い割合からいえば、織物業が最高でしょうが、そのほか、擦糸、水産加工、衣服縫製、ゴム、皮革などもあります。

婦人労働者の給源は、松岡町のように既婚者のところと、他県からの若い未婚の出稼労働者に依存しているところとあり、前者については、働く母と子の保護福祉の問題、后者については、労働者の募集、契約、住込、教養などの問題もあり、中小企業的一般労働問題と関連して特殊の婦人労働問題が潜在しています。

× × ×

婦人労働者を全体的にとおしてみると、戦后十年間に、数のうえでめざましい伸展をみせています。年平均でみますと、昭和二三年に三二九万であつた婦人の雇用労働数は、その後、多少の起伏はありますが、増加の一途を辿り昭和三年には五一五万と、戦后最高の水準に達し、今もなお上昇しています。昭和三年を一〇〇としてその増加率をみますと、昭和三年には、婦人一五七に對し、男子は一三〇で、婦人労働者の増加率は男子を凌いでいることがわかります。(労働力調査) 質のうえでみますと、平均年令では、昭和四年の二三・八才が、昭和二九年には二五・四才と高まり、勤続年数では三・二年から三・六年に、(労働省個人別賃金調査) 婦人労働者中、有夫者の割合は、規模三〇人以上の事業場で、昭和三年に

は九・〇%であつたものが、昭和三年には一六・二%とわずかずつ多くなる傾向がみえる。(女子保護実施状況調査) など、婦人労働者は、量、質ともに、年々推移しています。

それは、社会と経済のうごきに伴つておこる一般の現象ですが、婦人労働の場合は、とりわけ、婦人解放の機運の滲透にいちじるしく関連しています。

私はその後、第一線を退いて、本省勤務になりましたが、婦人解放開花期から今日までのはげしい移り変りのなかにきいてきた婦人労働者のなまの声を、いまもなお、たずねながら精一杯の仕事をしています。

(労働省婦人少年局婦人労働課)

